

山田風太郎



柳生十兵衛死す

山田風太郎

柳生十兵衛死す



毎日新聞社

やぎゆうじゆうべえし
柳生十兵衛死す 下

初出「柳生十兵衛死す」は、毎日新聞朝刊に、一九九一年四月一日から一九九二年三月二十五日まで連載されました。

一九九二年九月十五日 第一刷
一九九二年一〇月三〇日 第五刷

著者 山田 風太郎

編集人 深瀬 正頼
発行人 戸田 栄輔

発行所 毎日新聞社
〒一〇〇一五 東京都千代田区一ツ橋
〒五〇〇 大阪市北区堂島
〒六三三 北九州市小倉北区紺屋町
〒四〇〇 名古屋市中村区名駅

印刷 精文堂印刷
製本 大日製本

落丁・乱丁本は小社でおとりかえします。

目次

薪能たきぎのう 七

大塔燃ゆだいとう 三

室町へ翔ぶ夢幻能と 四〇

慶安へ翔ぶ夢幻能と 四一

兵どもが塔の跡つわもの 〇

獅子身中の獅子しし 一〇三

ある地誌的怪異 二四

仙洞御所の果たし状せんとうごしよ 二三

必殺御前試合 一三

一休平家琵琶 一六

金閣寺行幸みゆきの事 一六

廃墟まぼろしの魔童子 二〇

火定かじょう・水定すいじょう 三三

誰が十兵衛たおを斃すのか 三四

恋する女帝 三六

剣つるぎの果て 三七

大秘事 三九

日本国王源道義みなもとのどうぎ 四〇

大逆いずれぞ 四一

天地玄黄げんこう 四二

装幀 多田進・天野誠

柳生十兵衛死す

下

薪たきぎ

能のう

一

相国寺しょうこくじの大塔だいとうの西側の広場に、薪たきぎが炎々と燃えて、その赤い照明を受けて、「船橋」の能がくりひろげられていた。

薪能は、ただ薪を燃やして夜の野外能を観るためのショーではない。本来は奈良興福寺の宗教的行事なのである。

興福寺に御薪みかまきを献進するいわゆる「薪の神事」から発したもので、一種の春迎えの行事だ。寺院に神事とは面妖なようだが、このころの興福寺は春日大社と一体であったから特に神事と称したのである。その余興として猿楽ないし能が演じられたのだ。

この当時は、毎年二月五、六日から七日間、興福寺の五重塔と東金堂のあいだの広場で行われるのを常とし、ほかではやらない。

これが夜の野外能のショーとしてひろく鑑賞されるようになったのは、昭和も戦後になってか

らのことなのである。

去年、義満はその興福寺の薪能を見て、甚だ氣にいった。もういちど、ことしも見たいと思つたが、あいにく奈良までいつていられない。そこで、それを京のこの相国寺で見ることにしたのである。

それでは興福寺の神事にならないわけだが、そこは無際限の権力を行使することを生甲斐としてゐる義満で、この異例の催しの思いつきをおし通した。ただそれは二月六日の一日だけとし、見物の客も内輪にとどめた。

義満がこれを無理強いしたのは、薪の炎に照らされる夜の能の神秘さに感心したのもさることながら、その火光に下側から照らされる興福寺五重塔の妖しい美しさに眼を見張つたからで、それなら相国寺の七重塔はもつとすばらしいだろうと考えたからだ。

薪能は、地上何ヶ所かに薪の山を盛りあげて、これを燃やす。その火はすでに点じられ、七重塔は闇に浮かびあがつた。

果たせるかな、その異次元の美は、そこにゐる者すべてに、「ああ！」という嘆声を放たせた。軒の裏側の垂木のかさなり、尾垂木のからまり、雲肘木のうねり——それが七重にかさなつてゐるのだ。ふだんでもその豪壮さと優美さは感嘆せずにはいられないが、それが炎を下から浴びて、朱の光と紫の陰翳の波をゆらめかし、とうてい人間が創つた建造物とは思えない。

そもそも七重塔というものが前代未聞だ。

相国寺は、十余年前、義満が禅に凝つたころ、自分が座禅をくむために建てたものだが、それを五山第一の巨刹に作りあげ、その上——五重塔ならめずらしくない、まだ日本にない七重塔と

いうものをそびえさせよう、と思いたったものだ。

日本にないどころか、おそらくそのころ世界一であつたろう長安の大雁塔でさえ五十七メートルというのに、この七重塔は三百六十尺、一〇七メートルあつたという。

薬師寺の三重塔が凍れる音楽なら、この相国寺の七重塔は炎の音楽というべきか。これは義満の雲までつらぬく権力の誇示の象徴であつた。

大塔もさることながら、薪の火光のなかの能もいよいよ夢幻的だ。

地面の上で演じられているのは、「船橋」であつた。

上野の佐野の渡しで、里の男女に橋建立の勧進を乞われた山伏が、そのいわれを問えば、昔ここの船橋をわたつて夜な夜な忍び逢つた男女が、その仲を裂こうとする親のためにその船板をはずされ、知らずに渡ろうとして水死した。橋建立を乞うその里の男女は、いまなお河底で恋の妄執に苦しむ亡霊であつたという哀切な物語だ。

演じているのは大和四座の一つ、金春弥三郎一門であつたが、この謡曲が世阿弥作であることを義満は知っていたか、どうか。

たとえ現身の世阿弥を追放しても、能の世界ではいまなお追放できない世阿弥であつた。

二

「先の世の報いのままに生まれきて、報いのままに生まれきて、心に掛けばとても身の、生死の海をわたるべき、船橋を作らばや。……」

舞う恋の亡霊たちに、薪の火の粉が金粉のごとく吹きかかる。風が出てきたのだ。

風はどこか春を思わせる匂いもふくんでいるようであつたが、薪を燃やすにはすこし強すぎる不安をいだかせる。——それに、遠くからおどろおどろとぶきみな音響さえ鳴つてきたようだ。

「雷じゃないか」

と、將軍の見所けんじよのすぐ下に坐つていた御供衆おともの斯波刑部しばきやうぶが横をむいてささやいた。

「そうらしいな。春雷というにはちと早いが」

と、おなじ御供衆の赤松鉄心が答える。

ちらと上の見所を見ると、そこにつらねられたいくつかの燭台のなかに、將軍の左右にはべる一門の人々も、すこし動揺してきた気配であつたが、將軍だけは泰然として、大満悦のていで庭の能に見とれていようだ。

炎のたちのぼる真上には、雲がひくくたれ下がつていようにも見えたが、闇の空のこととてあとはまったくわからない。

と、また風が吹いて、無数の火の金蛾が七重塔のほうへ吹きつけていった。

それで火事の心配がある距離ではないが——それでも、能をへだててそのほうへ眼をやつた赤松鉄心が、「はてな？」と、つぶやいて首をのぼした。

いままで気がつかなかったが、七重塔の下に——一階の外側におぼろおぼろと浮かんでいる群が見えたのだ。みな袈裟頭巾けささずきんをかぶつて坐つていようだ。

「あれ見よ」

と、赤松鉄心は、となりの細川杖之介じやうのすけに、

「あそこにおるのは僧兵ではないか」

「さよう、きょうの観能に、あのようなのは招かれておらぬはず。――」

と、細川杖之介が立ちあがり、見所けんじょをふりあおいだ。

見所でも、ちょうどそれを発見して、ざわめきが起こつていた。

そうと知つて、相国寺の長老が義満に説明した。

「あれはおん曹子の義円さま以下の青蓮衆しやうれんしゆでござります。ここ二、三日、何やらご所用がある
とてあの大塔にご滞在で、たまたま今夜の薪能の儀をおききなされ、是非内々に拝見なされたい
とのことで――」

「なに、義円が？」

義満はげんな声で、

「それが大塔に滞在とはどういうわけじゃ？ あれは人間のとまる建物ではないぞ」

「は、拙僧にもよくわかりませぬが――」

実は長老は、ここ二、三日、その大塔七階に義円が女人を閉じこめていることは知っていたが、
いまそれは口にしなかった。

義円の意図がよくわからず、とにかく平生奇矯な行状の多いおん曹子なので、それもそんな悪
戯の一つだろうと見ていたからだ。

そして父の義満も、こんな報告をきいても、これまた狂童子の息子の奇行だと思つたのか、そ
れ以上何もきかず、あとはただ庭の薪能に眼を遊ばせていた。

吹きなびく炎の向うで、能はすすんでいる。

「夕日、ようやくかたむきて、霞の空もかき昏し、雲となり雨となる中有の道も近づくか、橋と見えても中絶えぬ、ここはまさしく東路の、佐野の船橋鳥はなし。……」

三

さてその青蓮衆である。

はからずも相国寺の薪能の見物にまぎれこんだかたちの荒法師たちも、はじめて見る夜の野外能の神秘さに心奪われ、すべてを忘れて見いつていたが、義円だけは憮然たるふくれつつらをしていた。

とうとう一休たちはこなかった。——そのあてはずれからである。

で、「南朝の女」は七階の心柱に結びつけて、闇黒のなかにおきざりにし、ともかくも自分たちは一階に下りて、その外側でめずらしい薪能を見物することにしたのだが。——

もし義満にきかれたら、一休母子、後南朝と通謀の不審あり、そこでその母をとらえ、一休を誘いよせる兵法であつたと答えれば、父も文句はあるまいと思う。

こうなつては一休はもとより、前々から無双の剣人とときく柳生十兵衛も、まさか將軍上覧の能の場にあばれこんでくるとは思えないが、万一にそなえ、東門の外に三人の青蓮衆を出して見張らせておいた。

と、その一人がかけもどつてきて、

「きましたっ」

と、低く、息をはずませて報告した。

「なに、一休がか？」

「いえ、いまのところ柳生十兵衛ただ一人のようで——鴨川のほうから東門に向つて」

みな、いつせいにがばと起たとうとした。

「待て。出迎えが早すぎれば、逃げられる。十兵衛一人なら斬つてもよいが」

義円は制して、

「夜にはいつて推参しようとは思わなんだが、向うにはそれなりの算段があるのだろう。まさか柳生が將軍家に危害を加えもすまいが、さればとてこの薪能のさなかに騒動を起こされては面倒だ。ここまでおびきよせて、塔のなかへ追い入れよう」

といった。

「半分は塔にはいれ。あとは知らぬ顔してここで待て。十兵衛が逃げるとまずい。騒ぐな」

僧兵たちは、青蓮衆しょうれんのほかあらたに來援を求めた叡山えいざんの山法師たちを加えて三十余人になつていたが、その半分がぞろぞろと塔のなかへはいつていった。

あとの連中も、薪能から眼をはなし、塔の横のほうに首をねじむけている。十兵衛は塔のうしろからそちらにまわつてくるはずだからだ。

しかるに十兵衛は、なかなかあらわれない。

さつきからきこえていた遠雷の音が、急にちかくなつた。と、薪たきぎの炎に、ぼつ、ぼつ、銀の糸がひかつてながれはじめた。

その場にいた者はいつせいに空をあおいだが、天には闇がひろがっているばかり。——

袈裟頭巾をつけた僧兵が一人、かけつけてきて、義円の前に片ひざをついたのはそのときであった。

「柳生十兵衛、推参してござる」

物見に出していた一人に相違ない。

「なに、どこへ？」

きよろきよろする義円に、

「おんまえに」

答えるやいなや、その僧兵は飛鳥のように躍りたち、むんずと義円の右腕をつかんだ。

袈裟頭巾のあいだからのぞいた眼の、右の一方が糸のようにとじられていることに気づいたのはその刹那であつた。

「や、や、や——」

柳生、と呼びかけてその声がとまってしまったのは、鉄環をはめられたような手くびの痛みのためだ。

まんまと僧兵に化けおおせた十兵衛の右手にはすでに白刃がぬきはらわれ、薪の遠火を受けて灼金のごとくひかりつつ、義円ののどくびにピタリとあてられている。

「余儀なき場合でござる。騒がれねばお命にさしさわりはなし」

十兵衛はじろりとまわりを見まわして、

「坊主どもも騒ぐなよ」

いうと、海老みたいにそりかえっている義円をなかば宙につるして、あいたままの扉から七重